

テニアン島の

幽霊

著
レギナ・グライ



テニアン島の幽霊

レギナ・グライ

この古い飛行場跡もいつかは土にかえる。自然はだんだんとすべてを取り戻そうとしている。コンクリートの隙間は雑草に支配されてしまったし、滑走路は両側から草木に取り囲まれ、骨格だけになった古い司令室には蜂が群がっている。

終わりのない息苦しい熱さの中では、あらゆるものがあっという間に朽ち果てる。情け容赦ない太陽が照りつけ、雨と風が滑走路を襲う。一年でいくつもの台風がやってくる。すべてがなくなるまで、どのくらいかかるのだろうか。

地面に空いた二つのくぼみには、昔爆弾が保管されていた。今は、その上にガラスの屋根がある。離れたところからは、二つともただの温室みたいに見える。近づけば、そのコンクリートのくぼみと背の高いイーゼルの上に、毎日、日光にさらされて少しずつ褪せていく白黒写真が姿を現してくる。写真には、二個の爆弾をB29爆撃機に積み込む兵士達が写っている。彼らは、暑さに上着を脱ぎ、裸の上半身をさらしている。この写真からは、この人たちが原爆を扱っていることなど知らなかったことがわかる。わかっていたとしても、放射線と呼ばれるものが自分たちを殺すことができるとは思わなかっただろう。彼らの裸の胸を見るたび、私は妙な気分になる。もちろん、シャツ一枚程度の布なんかじゃ放射線から身を守ることなんてできない。だから余計に裸の胸が弱々しく見えるのかもしれない。

イーゼルの上に写真を置いた現地の人は、何が映っているのかわかっていなかったらしい。一枚逆さまになっている。でも、温室には鍵がかかっていて、その鍵もないし、誰が持っているかさえ知らないから、私には写真を直すことができない。

もう二千回以上も、観光客にこの二機のB29爆撃機、エノラ・ゲイとボックスカーの話をしてきた。サイパンから五マイル南、日本からは一五〇〇マイル南にある小さい太平洋の島テニアンから、どうやってリトルボーイやファットマンを広島や長崎の上に落としたのかを。

滑走路脇の茂みの中に何か見えるような気がする。ことがある。過去の亡霊？ まさか。そのたび、自分のバカさ加減にあきれる。あれは亡霊なんかじゃなくて暑さのせい。こんな暑さでは、トランス状態みたいになって頭は回らない、感覚まで鈍くなってへとへとになる。

私の古い小型バスエアコンは、こんな暑さに対抗できない。走っているうちに、やっとすこしは効いてくるけど、観光客は短い時間で降りさせなければならぬから、役には立たない。温室の周りを案内する間、バスは炎天下に放置状態。戻った時には四十度以上、まるでオーブンみたいになっている。

観光客がいなくても、私はこの古い飛行場跡にひきよせられる。滑走路は人気もなく静かだ。ここの空気には過去の気配とジャングルの匂いがあふれ、熱がコンクリ

3 テニアン島の幽霊

トトの上にはたゆたっていて、不可思議な魅力を発散している。

雨の日には、雨水が地面を覆い、温室の窓ガラスを洗い流す。コンクリートとガラスに打ちつける雨や風におられる木の音。この場所が醸し出す、取り残されたような寂しさと荒れ果てた雰囲気には、ホラー映画を見た時のような怖さがある。

五月、テニアン島にはまったく風が吹かない。硬い石の壁が取り囲むように暑さが身体に迫ってくる。太陽がハンマーのように照りつけ、ひっきりなしに汗が出る。滑走路はコンクリートの照り返しで、死ぬほど暑い。

それが起きたのはそんな日だった。観光客は来なかったけれど、私はいつもの小型バスに乗って、滑走路まで行った。私は、バスを滑走路の真ん中に停めるとファットマンとリトルボーイの温室の間にある木かげに座って、マンガジュース、これは甘さを控えるために水で割ってある、それとサンドウィッチを食べていた。

たまには島の人が良く噛んでいるピンロウの実を試してみようかと思うけど、どんな効果があるのか怖くて、まだやったことはない。ドラッグの影響で本当に幽霊が見えちゃうかもしれない。それに、口の中はオレンジ色に染まっちゃうし、舌癌の危険もあるらしい。たしかに、こんな暑い日にピンロウの実を噛んだらどんな気持ちだろうとか、少しは暑さに耐えられるようになるのかなと思うこともあるけど。

「今日はとても暑いね」

驚いて声をあげてしまった。振り向くと、声をかけてきた男性をまじまじと見つめた。ここで人に会うとは考えてもみなかった。ほかの車はどこにもなかったし、彼が近づいてくる音も聞こえなかったから。

彼は私の後ろに立って微笑むと、ちょっと離れた草の上にバスのほうを向いて座り込んだ。白人で金髪、目は茶色、格好いい。三十年代前半でかなり日に焼けた肌。観光客より日焼けしているから、この辺に住んでいるはず。彼のカーキパンツとオリブグリーンのシャツは軍服みたいだけど、階級はわからない。

「ああ、びっくりした！」

本当に怖かったわけじゃないけど。島の人は、たいていお互いに親切にするものだし。住んでいる人が少なすぎて、そうしないわけにはいかなかったから。皆が知り合いつて環境で悪さはできない。

「申し訳ない、驚かせるつもりではなかった。私はジョン・パーカー、よろしく」彼はそう言って手を指し出した。

「よろしく、高橋七恵、ナナです」

私たちは握手した。

「ここに住んでいるの？ 今まで会ったことなかったですね」

「ええ、まあ……」

彼の答えを聞いても、あまり気にはならなかった。こ

の島にはドロップアウトした人が多いし、私を含めて……

「君はここに住んでどれくらい？」

「七年」

「なるほど」

「うん」

「観光？」私のバスを指さしながら彼は聞いた。

「ええ」

「他の人はどこ？」

「今日はいない」

「それなのにここに來てる？」

「そうね、ここに住み着いた人って皆ちよっとおかしいのかも」

彼は笑いながら頷いた。

「なぜ、ここに來る？」彼が聞いた。

「自分でも良く分からない。奇妙なところよね。六十年前は、サトウキビを植えた日本の植民地で、兵隊がいて、戦争があつて、アメリカの軍隊が島を占拠したり、いろんなことがあつたけど、今は何にもない。みんなずいぶん前のことだし。地球にはどんどん人が増えていくけど、ここは逆。一人でここに座っていると、いなくなる人達の存在を感じるができるような気がする。おかしいことを言ってるかな」私はちよっと恥ずかしくなつて笑つた。

「いや、そんなことはない」彼は微笑みながら言った。

彼の笑顔は素敵だった。

「あなたは、ここで何をしているの？」

「私はパイロットだ」

「おかしい、この島のパイロットは皆、知ってるはずなのに。」

「どこの会社？」

「軍隊」

「ああ……」すぐには理解できなかったけれど、結論にはたどり着いた。「グアム基地ね？」

彼は少し混乱しているようだったが、すぐに「そ、う、だ」と言った。

「ここには休みで來てるの？ 南の島はうんざりじゃない？」私は笑いながら言った。

彼は曖昧な笑みを浮かべた。「静かなところに行きたかった」

「それならテニアン島で正解」と、苦笑して私は言った。

「ロイヤルに泊まってるの？」

「えっ？」

「ホテル」

「あ、ああ、そう」

ロイヤルはこの島で一番大きなホテル。中国の投資家は、何も無いところに巨大なプールと黒い大理石のエントランスホールのあるホテルを作つた。そのカジノで散財するのは大体アジア人。中には破産するより死ぬほうがいいと思つてサイパンのスーパーサイドクリフに飛び込

お人もいる。

私は彼を観察してみた。ピンロウの実を噛んでいるのかもしれない。でも、浮世離れした感じがして、服はかなり古くて時代遅れだし、安っぽく見えた。これはおかしい。軍隊のパイロットだったら貧乏なはずなのに。

「ここには毎日来るのか？」と彼が聞いた。

「だいたいはい」

「なぜ日本に住まない？」

「静かなところに住みたかったから」と笑いながら答えた。

彼も笑った。「いつかは帰る？」

「まだわからない。今は帰りたくない」

「飽きないか？」

「ううん、そんなに。ほとんど毎日観光客が来るし。島の人はいい人たちだし。今はまだ、この島が好き。じゃなきゃ住んでられない。それ以外にここにいる理由はないしね。ここの生活は簡単でシンプル。日本での生活はもっとなんと面倒だし」

「なるほど」

もう大分前にお昼は食べ終わっていて、木陰でもかなり暑くなってきた。

「私は帰るわ、暑すぎるから」私はそう言って立ち上がった。「あなたの車はどこ？」

「ああ、向こうにある」

彼は自分の後ろの方を指した。

「まさか。むこうはただのジャングルよ」

「えっと、いや、こっち……」

今度は左の方を指した。

私はちよっと心配になって、「大丈夫？ 町まで連れて行ってあげましょうか？」と聞いた。

「いや、大丈夫。心配はいらない、ありがとう」彼は愛

想のいい笑顔を浮かべていた。

私は肩をすくめた、多分彼はドラッグでハイになっているんだ。

「じゃ、会えて楽しかったわ、ジョン。休暇を楽しんでね」

「ありがとう。そうしよう。ああ、そうだ、ナナ。これを君に」

そう言いながら、彼はズボンのポケットを探っていた。

私は彼を見つめながら待った。何が出てくるの？

彼はとっても古そうな小さい麻袋を出して私に差し出した。

「これ何？」

「試してみてくれ」

「いいえ、いいわ。ピンロウの実はやらないから」

「いや、ピンロウの実ではない。私はもうずいぶん長く持っていたから、そろそろ次の人に渡さなければと思っ

てね」

「何を？」

まだ、私は彼から袋を受け取ってなかった。昔、お母

さんに知らない人から物を貰うなど教えてもらったっけ。彼は、秘密めいた笑顔を浮かべて私の手に袋をのせると、やさしく握らせた。

彼は、素敵な手をしていた。私を捨ててサイパンにいる中国人の女に乗り換えた「フリーダム航空」のパイロットだったアメリカ人の元彼みたいな長い指。あいつのセスナなんかサイパンとテニアン島の間の海に落ちて沈んでしまえばいいのに……。

「この島で見つけた物だ。幸運をもたらすお守りのようなもの」とジョンが言った。

「ありがとう、でも……」

「気をつけて、ナナ」彼はそう言い、笑顔を見せた。

私が、もうもらってしまったのだからとポーチを空けようとすると、彼はこう言った。

「いや、後で見てくれ。家に帰ってから。悪い物ではない、心配しないで」

何も受け取るべきではなかったのかも。せめて中身を確かめたほうが良かった。でも、彼の微笑みと暑さに負けてしまった。今まで、いろいろな人たちと知り合う機会があった。ほとんど毎日、観光客とか、新しい人たちに出会ってきたから人間性についてはけっこうわかってるつもり。元彼を考えると自信を失うけど……。ジョンは悪い人じゃない、そんな風を感じた。どこか寂しげで、迷子みたいで。ちょっと奇妙なところがあったかもしれないけど、島の人はだいたいおかしいところがある

し、私はそんなところが好きだったから。私は、また肩をすくめると、ありがとうと言って別れた。

木陰を離れて、刺すような熱の中に出て行くと小型バスに向かった。中はもうサウナだろう。シートは座れないぐらいに熱くなってるはず。

バスに乗ってからお昼を食べた場所を見て、私は凍りついた。ジョン・パーカーがいない。まるで地球が彼を飲み込んだみたい……。

あわてて、あちこち見まわしてみたけど彼はどこにもいない。

バスの中は信じられないほどの暑さだった。

私は、貰った袋を隣の席に置いて、バスのエンジンをスタートさせた。

あの人、ジャングルを歩くのが、どのぐらい危険か分かっていないのかしら。あちこちに不発弾があって、何メートルか入り込めば、鉈を振るわなくちゃ前に進めなくなるのに。

バスを一八〇度回転させてジャングルの境目を調べてみたけど、彼はどこにも居なかった。

彼と彼の車を探して、滑走路を走り回ったけれど何も見えない。辺り一帯を走り回っても、ほかの車すら見当たらなかった。

やっと額の汗を冷ます程度にバスのエアコンが効いてきたけれど、ジョン・パーカーが消え去ったという恐怖

感のほうがよくほど効果があった。隣の席の袋が気になつたけれど、両手でハンドルをつかんでいなくちゃならないほど道が悪くて運転している間は開けることができない。何マイル走っても、他の車どころか生き物の影すらなかった。

自分でもおかしくなる。彼が幽霊だったら、握手なんかできないし、ましてや麻袋をもらうなんて……、できると思う？

急にジャングルが危険で不気味なものに見えてきた。蜂が群棲している指令室の近くを通りながら、中を見てみる。何千匹も蜂がいるのだから、誰もいないに決まっている。

彼の着てるものはずいぶんと時代遅れみたいに見えた。違ふ、違ふ、幽霊なんているわけない。そんなはずないから！

不安な気持ちのまま、第二次大戦の錆びた戦車を通り過ぎて、六十年前にアメリカ軍がブロードウェイと呼んだ寂しい道路を町へと向かった。

家に着くと、妙に興奮状態だった。それは本当にかなり古い麻袋みたいで、隣の席に置きっぱなしで開けることもできなかったし、ジョンが謎の失踪を遂げたりしたから、中身に対する好奇心でいっぱいだった。それで、ようやく開けてみた。

不思議な気持ちで、サメの歯で作った首飾りを取り出

した。サメの歯は何でできているかわからない古い時代のひもに一列に並べられている。じっと見つめると、このネックレスは少なくとも百年ぐらい前のもののように思えてくる。サメの歯は全体に黄色くなっていて、ネックレス自体は粗末で汚いけれど、古いからこそ特別で貴重な感じがした。観光客用のお土産なんかじゃなく、太平洋のどこかの種族のシャーマンかまじない師の持ち物みたい。ものすごく印象的。ジョンはこれをどこで手に入れたのだろう？

自分の首にはかけずに、私はネックレスをポーチに戻した。

やっぱり貰えない。これは貴重なものだ。なにより、かなり貧乏な感じの、見ず知らずの人からこんな贈り物を受け取ることはできない。

私はすぐロイヤルホテルに向かった。コンシェルジュの午後シフトに入ったのは友達のマイクだった。

「何でそいつを探してるの、ナナちゃん？ 浮気なアメリカ人にまだ懲りてない？」マイクは私をからかった。

私は、彼に笑顔を見せた。「見当違い、マイク。彼を見つけないきゃなんないのよ」

マイクは全然信じてないようだったけど、ホテルのコンピュータをチェックしてくれた。

「悪いな、ジョン・パーカーってやつはここには泊まってるじゃないよ」

それを聞いても私はあまり驚かなかった。

マイクは、いたずらっぽく笑顔を見せた。「サイパンとテニアン島の間の海に沈むアメリカ人がまた一人……」
笑いながら私は彼の腕を殴った。「どうかしら。ありがとう、マイク、またね」

ジョンのことは私の頭から離れなかった。答えを見つけてくれて、せっつかれてる感じ。あの人を見つけて出して、ネックレスを返さなきゃ。

その夜、麻袋からネックレスを出して、台所のテーブルの上に広げてみた。なぜだかわからないけど、それには存在感があった。まるで振動しているみたい。

まさか、そんな。バカみたい。魔法や幽霊を信じてもない私が、何を考えているのだろうか？ でも、ジョン・パーカーについてはおかしなことばかり。質問の答え方やロイヤルホテルに泊まってるって言ったことも、どこかの基地の所属かってことも。車もないのにどうやって現れて、どうやっていなくなったのか。六十年前みたいない服装……。

ダメ、ダメ。迷信みたいなことを信じるのはやめないと。ネックレスは首にかけずに、袋に戻してナイトテーブルの引き出しにしまった。

彼はグアムで働いている軍人で、ビンロウの実でハイになってたんだと思ひ込んで、眠ることにした。

その夜はとても変な夢を見た。その悪夢の中では、あの滑走路でゾンビの軍団がファットマンとリトルボーイ

を地獄から来た飛行機に積みこんでいて、そこにはジョンも居た。彼だけが美しくて命のあるもので、地獄の化物たちを統率していた。

次の日は、また観光客がきた。気にはなったけど、観光客を乗せてあの古い飛行場跡へ行って、観光案内をした。私は昨日お昼を食べた場所を、どきどきしながらずっと見つめていた。ジョンには会いたかったけど、もちろん彼はどこにもいない。

いつもと同じように、このあたりでは私のバスが一台だけ。このあたりで魂を持っているのも私と私が連れてきた観光客だけ、他には誰もいない。これもいつも通り。

私は温室の中の写真を見つめた。写真の中にジョンに似た男の人はいなかったけれど、もともと写真の状態が悪くて、判別は難しかったと思う。

島の人にジョン・パーカーとネックレスのことをしたら、あつという間に噂でもちきりになることなんてわかりきってる。島の人はみんな迷信深いんだから。ネックレスのことは話さずにマイクに助けてもらおうかとも思ったけど、やっぱりやめた。私はマイクって人をよく知ってる。あいつはお喋りがやめられない。彼に何か言ったら、半日後には島中の人の半分に知られてる。それで、島の人はマイクと同じ結論を出すよ。「ナナのやつ、また白人に捨てられたな……」

一週間後、ひどい天気のでいでツアーがキャンセルになった。穏やかな時期が終わり、ついに待ちに待った雨が降り始めた。冷たい雨と不気味な雰囲気にかされて、どうしても飛行場跡に行ってみたくなった。ジョン・パーカーのことも忘れられなくて、一人でいたら彼に会えるかもしれないと思ってネットレスも持っていった。

あのときのオーブンの中みたいな温度に比べると素晴らしく涼しい日で、島の上に垂れこめていた空気の壁を風がどうとう吹き飛ばしてくれた。

ネットレスをパンツのポケットにしのばせて、私はバスから降りてジョンに会った木へ向かった。出会の記憶は強烈に残っている。彼はきつとこのあたりにいる。まあ、幽霊だったらだけど……。

このネットレスで幽霊が呼び出せる？ そのために、ネットレスをくれたの？ そんな迷信じみた考えはやめたほうがいい。そんなことはわかっているはずなのに、木の下に立って例の袋からネットレスを取り出すと初めて自分の首にかけてみた。

一瞬、息のみ、叫びだしそうになった。

世界は一変した。雨が止み、一瞬で暗くなると、また明るくなる。まるで映画の早送りのように、私の周りの木が風の中で揺れていた。

とっさにネットレスを自分の首から取ると、まわりの揺れはおさまった。

怖かった。振り返ると、太陽が照りジャングルは雨の

あとで蒸気を発生させている。私のバスはまだ停めたままだ。空にはあちこち雲があるけれど、天気だけが完全に変わっていた。テニアン島の天気はすぐ変わるけど、こんなに早くは変わることはないし、変化の間、ほんの一瞬だけと真っ暗になった。

私は震えていた。手の中のネットレスを見つめる。

このネットレスが何かしたのは確かだ。信じられないことだけど、まるで時間を早めたような感じだった。それなら、ジョンは過去から来たということ？ そんなことありえない。

あわててバスに乗って家に帰ると、観光客のピックアップになんとか間に合う時間だった。丸一日なくなっている。

前の晩、戻らなかった私のことを近所の人たちはとても心配してくれて、警察を呼ぶところだった。飛行場でバスが泥にはまり帰れなかったと嘘をついて、急いで観光客のツアーに出発した。こんな日に、良いツアーをするのは忍耐力が必要だ。

夕方、私はまた台所のテーブルにネットレスを置いて、じっと見つめていた。

論理的に考えないと。これが時間を早めてしまうなら、ジョン・パーカーは過去からきたってことになる。そんなおかしい考えが正しいなら、彼はまだこの島のどこかにいるはず。お金もパスポートもこの島から出られる方法はないはずだ。

—— 彼を見つけないきゃ。

その気になって探してみれば、小さな島のことだから彼はすぐに見つかった。ジョンはロイヤルで庭師の仕事をしていた。

彼の仕事場で、おかしな妄想にとりつかれて「いつ生まれなのか」という質問をぶつけるといふ真似はしたくなかったから、しばらくの間見張ってみた。ジョンは人を避けて、お昼は一人で食べていた。宿は、とても安くぼろぼろなバックパッカーや地元の人が利用するようなホステルだった。

そこには、手料理を出す小さなレストランがあって、彼はここで毎晩食べていた。ある日、私は勇気を振り絞ってそのレストランに入り、彼がチャーハンとビールで夕食を取っているテーブルの前に座った。彼は私を見てとても驚いていたようだった。

「ジョン」

「えっ。やあ、ナナ。今は、サムと名乗ってる」

「え？」

「サム・ベーカーだ、念のため」

私は疑わしげな目を向けた。

「サム、話がしたいの」

「君がまだここにいるとは驚いたな」

「えっと……」

何を言えいいのかわからなかった。彼は私がネットワークを使って何百年も未来へ行くと思っていたの？ 思

わず笑いだしそうになった。

「食後にちょっと歩かないか」と彼が言った。

私はうなずいて、彼が食べるのを見ていた。

「ロイヤルで働いてるの？」

「そう、ラッキーだった」

彼はすぐに食べ終わり、レストランから出ると、人影のない道路をビーチへ向けて歩いた。

「試してみた？」と彼が聞いた。

「ええ、一日飛ばしちゃったみたい」

「みたいて？」

「よく分からないの」

「君は一日、失った。スキップしたって言うほうがいいかな」

私は、彼の横顔を見つめた。「このネットワークがタイムマシンだってこと？」

「何かは分からないけれど、タイムマシンという言葉は正しくないかもしれない。このネットワークは時間を早めるだけだ。過去には戻れない。首にかけると、時間を早めてしまう」

「あなたはいつ生まれたの？」

「いつだと思う？」

「一九一〇年ごろ？」

「近いな、誕生日は一九一二年二月一九日」

私は大きく息を吸い込んでいた。

「どうやって手に入れたの？」

「島の住人だよ。みんなおかしなやつだと思っていた。全然英語を話せなかったけど、いつも飛行場のあたりをうろついていた。追いつくとしても、マシンガンで怖れていないようで、毎日戻ってくる。そのうち私たちも構わなくなった。仕事の邪魔をするわけではなかったし、頭がおかしいと思っていたんだ。多分彼は、飛行機や白人を見たことがなかったのだろう。しばらくの間、私たちは彼をからかったが、それもやめてしまい、彼の存在にも慣れていった。一度、彼にコーラをあげたら、ひどく喜んでね。十五世紀あたりの人にとっては、コーラは空を飛ぶ機械よりさらに大きい奇跡だったんだろう。お返しに、彼はネックレスの入った袋をくれた。彼に促されるままに、ネックレスを首にかけると、時間が早く進んでいった。君のように、すぐネックレスをはずしたけれど、原爆を飛行機に乗せる準備の真ん中に現れてしまっただけ。皆がパニックを起こして、撃たれそうになったので、またネックレスを首にかけた」彼は言葉を止めると、深く息を吸った。

「しばらくネックレスをつけていると時間の流れが安定してきて、まわりが見えるようになる。何年もの間、あたりはジャングルしかなかった。人類は自ら滅亡の道をたどったんじゃないかと思った。その後、人々はここを記念の場所にした。しかし、私が見れるのを見て、人を死ぬほど怖がらせるようなことをする気はなかった。そのうち、君のバスが何回も、何回もやってくるのを見

た。いつも同じバスで、だからネックレスを取ってみようとと思った。六十五年間か……。自分でもまだ信じられない。つい二、三日前にネックレスを使ったような気がする。一九四五年のね。車、カラーテレビ、人々の服装や言動。コンピュータってやつについてはまだ何かはあまりよく理解できていないが……。それから、ロイヤルの設備は、素晴らしい。しかし、私はすべて失った。家族、生活、過去さえすべて。これからどうしたらいいか」

ふさぎこんだ様子で、彼は自分の靴を見つめていた。今彼はジーンズとTシャツを着て、スニーカーをはいている。

「それは、すごい話ね」私は言った。「歴史学者は山ほどあなたと話したがると思う。有名になるんじゃない。それに、科学者もこのネックレスを分析したがるだろうし」

「そんなことはしたくない。君がそうしたいのなら、ネックレスをつけて百年先の未来にでも行けるんだ。しかし、私はもういい、少なくとも今はね。混乱しているし、どうすればいいか途方に暮れている。戦争が終わって嬉しいだけだ。当たり前のように日本人の女性と話すことができる。ニュースで日本とアメリカは同盟国だと聞いた。ドイツも友達だし、現在はテロリストと言うものがない敵だと聞いた。テロリストなど私の子供のときにはいなかった。今の私はバスポートも何もない。あのホテルでバスポートなしで仕事をもらえただけでもラッキーだ。スーパーで食品の値段を見るまでは、給料の額を聞いて

すごい大金だと思っていたよ。でも、その食品の半分以上は何だか分からない。覚えることが山ほどある」

私はうなずいた、彼にとつて二十一世紀はとてもおかしなところに違いない。

「私も少しは説明してあげられると思う」

「そうしてもらえぬなら、とても嬉しいよ」

「わかった。じゃ、私には30年代や40年代の生活を教えて」

私が元気づけるために微笑んでみせると、彼は少し緊張を解いた。

「うれしいよ。ありがとう、ナナ」

「どういたしまして」

「もう一つ頼みがある」

「何？」

「取り敢えず、私が、どこでというよりいつのほうがいいかな、生まれたかは秘密にしてくれないか」

「了解、約束する」

「ありがとう」彼はきまり悪そうに笑いながら言った。

私たちは毎日会った。彼は私が今まで知り合った男性とは全然違っていて、礼儀正しく、騎士のようなどころがあった、それは言うまでもなく、彼を信じられないほど魅力的に見せていた。

私の元彼とジョンは二人ともアメリカ人だけど、まるで夜と昼みたいに違う。元彼は冒険好きで、自分の楽し

みために生きてるって感じの役立たずだったけど、ジョンは心の底から悪と戦うために軍隊に入ったような人で、快樂ではなく愛を求めていた。

始めのうち、彼の愛と榮譽の話は私はあまり真剣に受け取ることができなかった。うそっぽくて、作りものみたいに感じたんだと思う。きっと私たち現代人は何かを失ってきたんだ。この現代の世界でジョンは奇跡みたいな人だと思う。

とうとう、私たちは静かな浜辺で愛しあった。

私たちは暖かい砂の上に横になり手をつないで、星をじっと見上げていた。

「九十六歳の男にしてはいい体してる」

彼は大声で笑った。「ありがとう」

私は気持ちよいため息をついた。

「これからはずっと一緒にいてくれるね」

「これからってどういう意味？」

「君も気づいているように、私は愛と榮譽に聞してはとも真剣に受け止めている」と彼は思わせぶりに言った。

「君は私と結婚するべきだ。ネットワークスは二度と使わせない」

私は体を起こして彼をじっと見つめた。笑顔を見せていたけれど、その視線からは私の反応を恐れているのが伝わってきた。

「それってプロポーズ？」

「そうだ」

「あなただって本当に素敵」

「ありがとう」

「ネックレスか……。五十年後や百年後の世界がどうなってるのか知りたくなっちゃう」

「ナナ、お願いだ」

私は彼の唇に指をあてた。「もう使わない。使うなんてバカのこと。答えはイエス」

彼はとても幸せそうに微笑んだ。そして、キスは情熱的だった。

「だけど、あのネックレスが家にあるのはいや」私が言った。

「じゃ、壊そうか。深い海に捨てるかとか」

「ううん、いい考えがある。この世から魔法はほとんど消えちゃったけど、このネックレスは本物、神聖なものだもの、壊してしまったら神様が怒るかもしれない」

ちよっと待たされたけれど、彼は笑わなかった。私はこの人のこんなところが好き。

「流れに任せてみよう」と私が言った。

「でも、誰に渡す？　ここに戻ってこないようにするにはどうすればいい？」

私たちはしばらくそのことについて考えた。結婚式の日を決め、そしてネックレスはこんな風にした。サイパンから送りたくないからと理由をこじつけて、ハワイに出張に行く友達にネックレスをハワイから送ってくれるよう頼む。

友達に言われた通りにハワイから、送り主なしの荷物を東京の博物館に送る。パッケージの中には匿名のメモを入れる。

「このネックレスを一分間だけ首にかけてみてください」

作家からのご挨拶

私の短小説の日本語への翻訳は素晴らしい経験でした。作家が対症的であるほど翻訳がやりやすくなる。それなのに、対症的だっても罨がいっぱいある。

一つの言語で対症的な言葉は別な言語で対症的ではない可能性がある。

「テナンの幽霊」の中の一番印象強かった例「Purgatory」でした。クリスト教以外には「Purgatory」は存在していません。そうならどうやってそのないものを日本語に訳すればいいでしょうか？

結局灼熱地獄になりました、それは「Purgatory」が一番近くなったものです。その例を見ると言語から言語と文化から文化への翻訳はどのぐらい難しいと見えるようになります。妥協するのは必至のです。妥協は翻訳の冒険の一番大事なところです。

「テナンの幽霊」は英語か日本語か両方で楽しんでいただけるのを望んでおります。

翻訳などについてコメントがあれば
iguana14@hotmail.comへメールください。

私のほかの出版されてる作品についてホームページへどうぞ。

<http://www.juka-productions.com>

最後は嬉しい発表があります。Dark Quest Booksはつい最近私のノベラ「Lord of Water」を出版する予定です。宜しくお願い致します。

レギナ グライ

The Ghosts of Tinian

テニアン島の幽霊

著 作 レギナ・グライ
翻訳協力 はるこん実行委員有志 (山本/大串/瀬貫/あみい/CONS)
表紙・デザイン AMAB
発 行 2011年4月9日(はるこん2011)
印 刷 モノクロレーザ(自家製本)
メー ル iguana14@hotmail.com
サ イ ト <http://www.juka-productions.com>

この本は「はるこん2011」持ち込み企画「Lost in transit」に使用されたものです。